
女性恐怖症の俺とヤンデレの幼馴染

鎖 真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女性恐怖症の俺とヤンデレの幼馴染

【Nコード】

N9487M

【作者名】

鎖 真

【あらすじ】

女性恐怖症の主人公。 主人公は、幼馴染が原因で女性恐怖症に。幼馴染は主人公の原因でヤンデレに。そんな二人の関係を描いた恋愛小説です。

気軽に読んでみて下さい

第1話

皆さんこんにちは。あ、今はおはようございますか。俺、椿つばき薫かおる。
普通の黒髪黒眼の日本人、高校生。だが、俺はある事に関しては普通ではなかった。〇〇恐怖症。その恐怖症とは――



朝の登校時間。俺はいつもと同じように、7時半ジャストに家を出ていつもと同じ通学路を歩いていた。7時半ジャストに家を出ることには意味がある。7時30分から、7時47分の間は俺と同じようにこの通学路を通る生徒は極少数だからだ。

私立工蓮しりつこうれん高校。この街で唯一の共学。唯一と言っても、街には三つ高校がある。女子高、男子高、共学高。その一つなだけ。

そんなごく普通の共学高校に俺は通っている。だが、そのごく普通の共学高校ですら俺にとっては苦痛の毎日である。

「おーい。薫、おはよー」

この、7時30分から7時47分の間の登校時間に俺に声を掛ける人物。俺は、その、女子高生特有の高い声にビクッと体が反応した。それと同時に寒気が体を取り巻く。

ふと、その声ができる背後に振り返ると結構な勢いでこちらに走ってくる、工蓮高校の制服を着た女子生徒一名。

「ス、ストップ！止まれ！止まって下さい」

俺は、大声でそう叫ぶと同時に、俺に向かって走ってくる女子生徒に直角90°に腰を曲げて頭を下げる。そんな、男のプライドもくそもない行動に、女子生徒は「はぁ〜」と小さくため息をついて、俺との距離約1.5mの所で急停止。

「あんたの、それ。いつになったら直るんでしょうね？」

やれやれ、と言った感じに腰に手を当てる女子生徒。少し茶が混じっている黒髪を後頭部らへんと言う少し低めの位置でツインテールにしている。それでも、なお腰辺りまであるその長髪がフサッと左右に揺れる。

「わ、分らん。でも簡単には……」

「そうよね。中学の3年間。ずっと変わりなしだったもんね」

この、女子生徒。鈴桐^{りんどう}つかさ。つかさって名前は、漢字で書く

のではなく平仮名なんだそうだ。そんな、つかさとは中学3年の頃に色々あって、今は俺の数少ない女友達の一人。

背は女子にしてはやや高め。その、学校指定のミニスカートによってさらけ出しているツヤツヤな長い足がより背を高く感じさせる。ルックスも、そこそこで下手なアイドルなんかより美人。そして、極め付けにその女子高生にしては少し大きい胸。普通に、街を歩いてたらすぐナンパでもされそうだ。

「何ジロジロと見てんのよ」

「まさか。俺が女相手にそんな事が出来るとでも？」

「むっ。今日は、気合入れてきたのに……」

「ん？何か言ったか？」

「別に！」

理由は分からないが、どこか不機嫌そうなつかさ。まあ、朝からこんなに俺に引かれてるんだから不機嫌にもなるよな。ほんとごめん、つかさ。でも、俺のこれ……“女性恐怖症”はどうにも、今の段階では克服できそうにもない。

俺の恐怖症。それは、女性に対するものである。つかさとは、長い付き合いだからそれ程でもないが、女性に視線をロックされると、ビクビクと体が震える。近づくのも最高で82cmが限界。触れられたら、オーバーヒート。体の自由が効かなくなる。最悪、気絶した事だってある程だ。

これは、端から見ればただのヘタレ男子なのだろうが、俺にとってはもの凄く苦しい事。生きている限り、女と出会うのは避けられない。だから、俺はいつも恐怖に支配されている……。

女性恐怖症の俺を、共学ではなく男子高に入れると言う話も、色々持ち上がった。だが、社会に出た時の事も考えて学生の内に克服させようという事で共学に入れさせられた。

こんな俺でも、昔から女が怖かった訳ではない。幼い頃、ずっと一緒だった女の子が原因で俺はこうなってしまった。だが、それと同時に俺が原因でその女の子も変ってしまった。その子が転校して、月日が流れ、成長した今。思えば最低な事をしたのだとつくづく思ってしまう。

「ねえ。ねえ薫ってば！」

「え！？ ああ。何？」

「もう！薫がボケーっとしてるから、眼を覚まさせてあげたんじゃない」

「はいはい。それは、どうも」

つかさ……こんなにも、女性恐怖症の俺に拒絶されてるのに友達で居てくれている。素直じゃない所もあるが、根は凄くいい奴なん

だと改めて思うよ。まったく。

だからこそ、あの子のように傷つけて変えてしまうのが怖くなる。

「つかさはさ、何でこんな俺にかまったりしているんだ？」

「何言ってるの？意味分らない」

「だってさ、今もこんなに距離とったりとか、俺に付き合っていると色々と気をつかうだろ？それなのに、俺は女を克服できないままだし。正直面倒くさいし、嫌いにもなるだろ？普通」

俺が、何げなく青く雲一つない空を見上げながら、言う。

その言葉を聞いたつかさは、今歩いてる通学路の道のと真ん中で立ち止まった。いったいどうしたのかと思い、振り返ると黙って地面に俯いている。どうしたのだろうか？気分でも悪いのか？

そう思った時。つかさの口が開いた。

「嫌いになんかならないよ。だって、私……薫の事。ずっとあの時から……」

あの時？ああ。もしかして、中学1年の……確か8月の夏休みの時の事を言ってるのだろうか？ あれは、俺とつかさが初めて知り合った時の事だったか……。

にしても、俺の事がどうかしたのか？

「薫……放課後言うつもりだったけど、今言うね」

「うん？なんだ。放課後聞くつもりだったが、今聞こう」

そう言っ、つかさは手をモジモジとしだしたかと思えば、今度は顔を真っ赤にして俺を見つめる。

う……。そんな、つかさの視線によって俺の女性恐怖症と言うヘタレ病が発動。ビクビクと震える。今すぐにでも、どこかに隠れて

しまいたい。だが、それではいつまでたっても克服なんて出来る訳がない。必死に震える足をふんばり、心を強くする。

「私ね、薫の事す——」

「おー！朝から仲がいいですな。お二人さん」

「……………」

つかさの言葉を、絶妙なタイミングで遮る男子生徒一名。こいつは、つかさと同じく中学一年の頃に出会った俺の親友でもあり、悪友でもある。名は、すぎやまりようじ杉山亮二。そして、亮二の登場でさっきまで真っ赤になっていたつかさは、恐ろしい程に冷たい視線で亮二を睨みつけている。

あれには、別に女性恐怖症でもなんでもない亮二ですら恐怖を感じているらしく、俺と同じようにビクビクと体を震わせている。

そこで、俺は勇気を振り絞りつかさに話しかける。

「つ、つかさ…………？さっき何て言おうとしたんだ？」

「何でもないわ…………」

そ、そうですか…………。

その後は、不機嫌オーラを出しまくりのつかさと、それにビビル男子生徒二名。俺と亮二は会話もなく学校へと、通学路をスタスタと歩いていった。



「おい、薫」

「なんだよ亮二。つかさのご機嫌はちゃんととったのか？」

「いや、それはまだだが…………それよりもだ」

席に着くなり、そうそうに亮二がさっきまでとは大違いに元気ハツラツで俺に話しかけてきた。だがな、亮二。つかさの機嫌よりも大事なってのは、よっぽどたいした話なんだろうな。

ちなみに、俺の席は窓側の一番後ろの席。これも、俺の女性恐怖症の事を知っている担任がしてくれた事だ。これ程いいポジションはない。更に言うと、隣の席には女子なんてのは居ない。勿論男子もだ。と、言うよりも元から最後列には俺しか居ないんだよね……。

「転校生が来るんだよ。転校生が」

「へ」

「なんだよ。もっと盛り上がれよ。それと、俺は、女子である事を心の底から願うぜ」

転校生ね。男子である事を俺は願うね。もし、女子であって見ろ。俺の事情を知らずに喋りかけて、どうなるか分かってるだろうが。それに、ただでさえこのクラスは女子が男子より多いってのに、これ以上女子が増えるのはきつい。

多いっていても、男子17名。女子19名と、たった二人だけなのだが、それでも俺にとっては多いのだ。

「おい。席に着け馬鹿ども」

チャイムが鳴り、いきなり自分のクラスのかわいい生徒を馬鹿呼ばわりする教師が入ってきた。

教卓には、いつもやる気のない女担任。西条光先生さいじょうひかるが、黒板に背を預けて立っている。黒のスーツの下からは、裾が出たまま。ネクタイは締めなくてもいいんじゃないかと思うぐらいのゆるゆるさ。肩まである綺麗な筈の金髪はボサボサ。眼は半開きと、本当に教師なのかと疑いたくなる。それ以前に、女としての自覚はないのだろうか？

「お前等喜べ。今日はこのクラスに転校生がくるんだぞ」

そんな事をサラッとと言う西条先生。だが、その言葉はしっかりとクラス全員の耳に伝わっている。てか、もう皆知ってますけどね。噂ってどこから出てるんだろうね？

「先生！その転校生は、男ですか？女ですか？」

皆の代表として、聞くのは勿論亮二。勢いよく立ち上がり、右手を大きく天井に向ける。そして、時間差で椅子がガシャンと倒れる。後ろの席の奴に迷惑極まりない。

「気になるか。よし。私に跪けば教えてやらんでもないな」

その言葉を聞くなり、皆のやれと言う視線が亮二を貫く。亮二も亮二で、何の躊躇いもなくつかつかと西条先生に近寄り、膝をつく。

「転校生は……男ですか？女ですか……？」

そう言いながら、額を床につける亮二。プライドも何もないのかと思ってしまう。だが、それを言うなら朝からつかさに頭を下げた俺もそうだ。

にしてもだ。転校生は男ですか？女ですか？と聞きながら土下座をするのは、何とか滅茶苦茶違和感バリバリだな。おい。

「まあ冗談はこのくらいにして……と」

ひでえ。

「女だ。それも飛びっきりの美少女だ」

「「「うおおおおおおお！」」「」」

野獣の叫び。青春真っ只中の思春期男子高校生にとっては、これ程喜ばしい事はないだろう。転校生は女。しかも、あの西条先生がとびっきりの美少女と言うのだから、男子としては盛り上がるのは当然だ。

だが、俺は落ちていた。肘をたて、ふと窓から朝も見ただけの青い空を眺める。

「なんて、青い空なんだ……」

俺が、窓から視線を元に戻すと、俺の席から斜め前の前の席にいたつかさがこちらをチラと見てきた。そして、再びビクつく俺。そんな、俺を見てつかさは何故かホッと安心するかのようでその大きな胸を撫で下ろす。なんだか、今日のつかさは朝と言い少し変だな。

「それじゃあ、入ってこい」

西条先生のやる気ののない声とともに、教室のドアがゆっくりと開かれる。

入ってきたのは、日本人特有の黒髪をつかさ並みに長く伸ばして、それをポニーテールと言う馬の尾のように結んでいる。

そして、きめ細かい白い肌に、身長は女子高生のそれ。スタイルもよく足も長い、つかさにも引けをとらない美少女。西条先生が言うだけの事はある。男なら誰もが、その美の虜になりそうなもの。

実際に、クラスの男子一同は飛び跳ねたりと大騒ぎ。

だが、俺は違った……。足の振るえが止まらない。寒気がする。鳥肌が一気に全身を覆う。初めての女に対しては、やはり怖いが、

見られてもいないのにここまで恐怖を感じることはない……。

「神風奈々（かななぎなな）と言います。小学生6年の頃にこの街から引越して、三年と二ヶ月ぶりに帰ってきました。どうぞよろしくお願いします」

簡単な自己紹介を終わらせると、彼女は小首を傾げてニコッと微笑む。そのかわいらしい笑顔は男子を更に盛り上げ、女子ですら、嫉妬などではなく、ただ純粹にかわいいと思ってしまう程。

（奈々……………）

——ガクガクガク。心と体の底から恐怖が込み上げてくる。

福谷奈々……………。見違える程の美人になってはいるが、俺にはすぐに分かった。

俺の女性恐怖症の原因である、幼馴染。あの頃の恐怖は、俺の奥深くまで植えつけられている。そのせいで、今だ女性恐怖症を克服できていない。

あいつ……………帰ってきたのか。でも、俺に気づいていない？ そうだ。俺も変ってるんだ。あいつが気づかないという可能性もある。だが、奈々の奴あれはもう治ったのか？ あの様子からして、普通の女子高生のようなだ。しかし、何だこの感じ。昔とまったく同じ恐怖をあいっから感じるのは何故だ。



（最悪だ……………よりによって、奈々の奴が俺の隣の席とは……………）

普通に考えれば何もおかしくはない。俺のいる最後列は、俺一人で隣には誰一人としていないのだから、奈々がすぐ横に来るのは当然と言っている。

だが、こいつ。本気で俺って事が分かっていないのか？ 今の性格

からして、ありえない話でもない。あの時のままだと、すぐに俺だと分かる筈。だが、今のこいつはおしとやかな普通の美少女女子高生。

この、違和感は俺の気にしすぎか？ まあそれならそれで別に構わない。

「椿、薫さん。神風奈々です。これからよろしくお願いします」

「え？ あ、ああはい。こちらこそよろしくお願いします……」

自己紹介時同様に微笑みながら、クラスメイトの名前と席位置を書いたリストを見て、俺に礼儀正しく挨拶をしてくる奈々。こいつ、俺の名前を見ても、本当に初対面のように接してくるな。本当に俺の事忘れてしまっている様子。あれだけ酷い事をしたんだ。忘れていてもおかしくないか…… なら、それ程ビクつく事もないな。

そんな事を思いながら、俺はいつもと同じように授業を受けた。



一時限目の授業が終わり、転校生の宿命として奈々がクラスメイト一同から質問攻めにあっていった。笑みを絶やさずに楽しくクラスメイトとの質問に答える奈々。勿論その中には多数の女子。俺は隣の席にはいられなくなり、亮二の席に居た。何故わざわざ亮二の席に行く必要があるのかと言うと、俺は少し調子が悪かった。

授業中の間、ずっと隣の奈々から異様な視線を何度か感じたからだ。俺はとにかく無視して耐えきったが、あれはただ隣である俺に興味があると言うだけの事だろうか？ 本当は、覚えているんじゃないか？ そんな事をずっと考えているとどんどん体の調子が悪くなったと言う訳だ。

「ねえ薫。大丈夫？」

「つかさ……か」

亮二の机に突っ放していた俺に声を掛けてきたのはつかさだった。ある程度俺の為を思って、距離をとっているが心配してくれえいるようだ。

「保健室行く？」

「ああ。そうしようかな……体の調子悪いし」

「一人で行ける？私もついていこうか？」

「いや、いい。一人で大丈夫だ」

そう言って、俺は教室を出ようとした。その時、ふと背後から声をかけられた。

「椿さん？どこかに行くんですか？」

その声の主が誰なのかはすぐに分かった。ゾクッと俺の背中に冷や汗がツーと流れるのが分かる。ゆっくり振り向くと、そこにはクラスメイトに囲まれながらも、俺に視線を向ける奈々。

そう、俺に声をかけた主は奈々。

「いや、少し保健室に……」

それだけ言い残して、俺は教室を出たと同時に保健室までもうダッシュ。ただ、今すぐにでもどこかに逃げ出したかった。奈々が俺を忘れていても、俺はあいつの事をよく覚えている。

その記憶のせいで、奈々に俺は恐怖してしまう。

「すみません。少し体調が悪いんで、休ませてもらってもいいですか？」

「あら、椿君。また、いつもの女性恐怖症？」

「はい……」

俺は、ちよくちよく保健の先生にお世話になっている。今みたいに、たまに女性恐怖症のせいで体調を崩す時があるからだ。

保健室の久遠^{くおん}怜奈^{れな}先生。眼鏡をかけた女の人。男子生徒からは、絶大な人気を誇る先生である。

そんな、久遠先生を含め俺の女性恐怖症と言う事は教員全員が知っていて、色々と克服できるように協力してくれてたりもしている。

「じゃあそのベット使って。誰も居ないからゆっくり出来ると思うわ」

「はい。度々すみません」

「いいのよ。あ、私はちよつと用事で、今から出張だけど一人で大丈夫？」

「はい。おかまいなく」

「そう？じゃあ、ゆっくり休んでいってね」

そう言って、久遠先生は保健室を出て行った。

俺は、久遠先生に言われたベットに横になり布団を肩までかる。

「……………」

静かだ。この時間が俺にとっては天国にでもいるように感じられる程に、気分が楽になる。そう考えると、すぐに睡魔が俺を闇へと誘ってくる。俺は、何の抵抗もせずそのまま意識を睡魔にゆだねた……。

第1話（後書き）

ども。短編で投稿した作品を、連載として投稿していきます。
更新は不定期になるかと思っています。
では、これからよろしく願います♪

第2話

——キーンコーンカーンコーン。

チャイムが学校中に鳴り響く。どこの学校でも、このキーンコーンとかいう音なのだろうか？

俺は、そんなチャイムの音で目が覚めた。ベットで横になっていて体を起こす。ふと、真横の棚の上にあった時計が眼に入る。時計の針は、既に12時5分をすぎた所に止まっている。目覚ましのタイマーは確か久遠先生が、1時間後に設定してくれていたはずだ。

「寝過ごした……」

これを、寝過ごしたと言うのは少しおかしい。だが、目覚ましに気づかずに熟睡するとは……俺はどうやら相当疲れていたらしい。実際に今でも体がダルイ。目の前が少し揺れる。

——ガラ……

誰かが保健室に入ってきた。今は確か、久遠先生は出張中で居ないはず……。

ツカツカと足音を立てながら、ゆっくりと俺の寝ているベットに近づいてくるのが分かる。今入ってきた生徒、もしくは教員は確実に俺に用がある人物。

——ドクン、ドクン、ドクン。

妙に心臓の鼓動が、体から聞こえてくるかのように大きくうつ。ただ誰かが俺に用があって、来ただけなのに何故こんなにビビル必要がある。——女だからだ……。

俺にはわかる。いつも感じている恐怖。たとえ今はその姿が見えなくてもなんとなく分かってしまう。しかも、この静かな保健室。足音がいつも以上に大きく聞える。

(まさか……な、な……か?)

そんな筈はない。あいつは俺の事は忘れている。だが、何故か昔の奈々の笑みが俺の頭を過ぎった。まるで、警告するかのように俺の体はブルブルと震え、冷や汗が全身から流れだす。体が動かない。指を動かそうとしても力が入らない。視線が、開かれるカーテンから外れない。

——シャー。その白いカーテンがゆっくりと開かれた。そこに居たのは……。

「つか……さか。はあ、はあ、はあ」

「ちよつと、大丈夫!? 薫。すごい汗じゃない」

そう言っ、つかさは俺の肩に触れようとした。その事に俺の体はビクッと跳ね上げる。——怖い……。

「ご、ごめん……」

小さく呟き、暗い表情で俺から距離をとるつかさ。確かに、心配してくれてるのにこんな反応されちゃあ傷つくよな普通。俺は最低な奴だ。何も変っちゃいない。知り合って3年になるって言うのに。

「つかさ。もしかして、俺の事心配できてくれた?」

「な!?! そ、そんな訳ないじゃない! 　ただ薫がなかなか教室に帰ってこないから……」

つかさ、それは心配してくれているのどう違うのか俺に教えて

はくれないだろうか？ まあこいつが、妙な所で素直じゃないのは分かってるけどな。でも、ちゃんと優しい奴だ。

「俺は、後少しだけ休むからさ。早く購買に行かないと昼飯なくなるぞ？」

「う、うん……あのさ、薰」

「うん？」

「朝のね、言おうとした事。放課後、言うから……」

「おう」

顔を、今朝どうように真っ赤にして保健室を出て行くつかさ。朝の言おうとした事って、亮二のせいで不発したやつ事だろうな。なんだろう、めっちゃ気になってきた。

「まあいいか。後少し寝るか……」

さっきまで十分寝ていたのに、まだ寝る俺。さっきの、つかさが来た事によって色々とまた疲れてしまった。5時間目は休んで、6時間目は出よう。

そんな事を考えながら、再びベットに転がり眼を瞑る。

——ボフッ

何かが、俺の体の上に乗った？ ——重たい。これは、布団の重さを遥かに超えている。何かが俺の上に乗っている？ 何が？ 眼を閉じて10秒も経たない内に、再び眼を開ける俺。そこには——

「ねえ薫君……あの娘……なに？」

俺の上に乗っていた、重い何か。それは、『人』『女』『女子生徒』『転校生』『幼馴染』

俺のよく知っている、その人物は俺とキスしそうな程に顔を近づけて質問してくる。半覚醒状態の、俺の意識が一気に覚醒していく。眼が大きく開いているのが、自分でもよく分かる。心臓が異常なまでに、速く鼓動する。体全身が硬直。

額から頬にかけて汗が流れる。

「な……な……」

「薫君。もう一度聞くよ？ あの子、なに？」

冷えきったものの凄く冷たい瞳で、俺の瞳を見つめる奈々。

こいつ、俺の事……覚えてやがった。朝のあれは、猫被ってたのか……。よくよく考えれば、俺が酷い事をしたってこいつは俺の事忘れる訳がない。何故、忘れてるのかなんて考えた。安心したかったから？ 昔に戻りたくなかったから？ 昔の奈々を忘れたかったから？ だから、別人という認識でいたのか？ 俺の記憶の奥底にこびりついている奈々を消したかったから？

「これで、最後だよ？ 薫君。 あの子は……なに？」

「お、俺の……友、達……？」

「ふーん。 薫君の友達なんだ。 そうだよな、あの子が薫君の友達以上の訳ないよね」

そう言って、奈々は俺から顔を引き離す。そして、ニコツと満面の笑みを浮かべる奈々。

それと、同時に俺は冗談ではなく意識が今にも吹っ飛びそうになっていた。ただでさえ、女に触れられるだけで硬直してしまうと言うのに、こんな馬乗りで俺の上に乗られ密着されれば意識も飛ぶ。

だが、それはなかった……奈々は俺の右腕の皮膚を、引きちぎられるかと思うぐらいに抓り、痛みで俺の意識を保たせていた。そのせいで、いつも以上の女性恐怖症による体の振るえが止まらない。

「ねえ薫君。私、薫君に会いたくて、会いたくて帰ってきたんだよ？嬉しい？ 私は薫君に会えて本当に嬉しいよ。一目で薫君だって分かったよ私。昔の薫君も格好良かったけど、今はもっと格好良くなってるって惚れ直しちゃった。思わず、薫君に抱きつきたくなくなっちゃったんだよ？ でもね、薫君の事も考えてね、二人きりになれるのをずっと待ってたの。でも薫君が望むなら私人前でも平気だよ？だって、私薫君の事好きだもん。世界、ううん。宇宙で一番薫君の事大好き。他の人なんて、別にどうでもよくなっちゃうくらい好き。薫君も私の事好きだよ？ね？ どうして、すぐに答えてくれなの？ あ、そっか。私に会えて感激すぎて言葉も出ないって言うやつでしょ。もう、薫君ってば。私恥ずかしい。そうだ、今からキスしようよ。あの時は、薫君が恥ずかしがって出来なかったけど、今はもう高校生だし、うれしいでしょ？あ、でも私初めてだからそんなに上手くないの。薫君も始めてでしょ？ 薫君が、私以外の女となんかキスなんてしないもんね。だって、私がこんなに薫君の事好きなんだし、薫君も私の事好きなんだから当然よね。なんならキスの後もしちゃう？恥ずかしいけど薫君となら私別にいいよ？保健室でなんて、ドキドキするね。保険の先生は出張中って西条先生言ってたし。でも、お昼休みまでに終わるかな？ そうだ、5時間目はさぼっちゃおうか。転校初日からさぼるなんて、薫君の事思えば私なんとも思わないから安心して？そうだ。子供は何人欲しい？私はね、二人は欲しいな。男の子と女の子の。それでね、私と薫君と子供二人とで、遊園地とかいきたいね。勿論お弁当は私が作るよ。ちゃんと薫君の体のバランスも考えて、薫君の好きなものも入れるからね。私薫君の為に料理も出来るようになったんだよ。だから、おいしいって言ってくれたら私うれしいな。それとね――」

朝の教室に居た時とは、まったく別人の奈々。

こいつ……やっぱりなにも変ってねえ。それどころか、昔以上だ。昔の頃の俺は、この変ってしまった奈々によって、女性恐怖症になった。それが、今もずっと続いている。

だが、元を辿れば俺があんな事を奈々にしなければ、こんな性格にもならなかったんだよね……。

俺が悪いんだ。俺が……。

そんな事を考えている内に、抓られている腕の皮膚が痛みを感じなくなっていくのが分かる。これは、色々俺の腕の皮膚がやばい。だがそんな事を気にする間もなく、俺は意識を失った。



「だから私ね………薫君？寝ちゃったの？そっか、今でも薫君は恥ずかしがりなんだね。うん。また一つ薫君の事しっかりと頭に入れたよ。ああ。やっと薫に会えたんだ。私この3年間寂しかった。薫君に会えなくて寂しかった……」

そう言って、薫の右腕の抓っていた皮膚をペロっと舌で舐めた後、奈々は心臓の音を聞くかのように目を瞑り、薫の胸に顔をつける。

「でも、これからは毎日会える。薫君に毎日会えるんだ……昔みたいに毎日……」

そう、呟いた後。ちょうど午後の授業の予鈴が鳴る。奈々は少し心惜しそうにするが、ウフフと本当に嬉しそうに一度笑い保健室を出て行った。

第2話（後書き）

短めの二話です。 どうでしょうか？ヤンデレってのを上手く書けているでしょうか？

ヤンデレってのは、短編で一度書いただけなんでよく分からないんですよ。

感想なんか頂けたらうれしいです♪ではでは。

第3話

夜。家のドアを開くと、俺は固まった。

「薰く〜ん、おかえり〜。遅かったね、何してたの？私は2時間前には帰ってきて、薰君の為に夕食の準備してたんだよ？」

これだ。家に帰るなり奈々に抱きつかれて、俺の女性恐怖症と言うヘタレ病が発動。

意識はある、だが体が硬直する。

「ねえ薰君、私今日からここで薰君と一緒に住むことになったから」

俺から離れて、手をモジモジしながら話す奈々。

てか、奈々が今日から俺と一緒にこの家で住む？

「ちょ、ちょっと待て奈々。は？住むって……え？」

俺は奈々の言った言葉が今一理解できなかった。いや、理解はできているのだがその事実を素直に受け止めたくなかった。

「お母さんの許可はもう貰ってるの。あ、今は婦人会に行ってるって。だから夕食は二人っきりで食べれるね♪」

すごくうれしそうな表情を俺に見せる奈々。

奈々の言うお母さんとは、奈々の母親の事だろうか？ 違うな。

俺の母さんの事を言っているのであろう。あの時からこいつは母さ

んの事をお母さんと言ったから、たぶんそうだろう。

だがちよと待て、母さんは俺が女性恐怖症って事は知ってるよな？　いいや、一番理解してくれているはずだ。なのに奈々を家^{うち}に住まわせるのを許可した？

何故だ。

「ほら、早く。薫君」

「う、うわ！」

奈々に腕を掴まれた瞬間に、思わず叫んでしまった。

しかし奈々は気にしない。固まった俺を無理矢理引きずってリビングへと連行する。

「薫君が女性恐怖症っての言うのは知ってるよ。お母さんからさっき聞いた。でも私はそんなの気にしないから安心してね？」

ね？　じゃない！

奈々は気にしなくても、俺がダメになるんだから安心なんてできるか！

リビングに入ると、やたらと良い匂いが俺の鼻を刺激する。だが、奈々に掴まれている事によって俺の頭は今にもシャットダウンしそうだ。

「ほら、薫君。座って座って」

腕から離れたかと思うと、今度は背中を押されて無理矢理にも近いが、席に着かされた。

ふと視線だけを横に移すと、俺の席の隣にあるはずのないイスが一つあった。

この家は、俺と母さんの二人で暮らしている。よって、イスは二つのはず。だが今は俺の目の前に一つ。そして隣に一つ。計三つのイスがあった。

（本気でこの家に住むきかよ……）

俺を席に着かせるなり、奈々は俺の隣のあるはずのないイスに座る。その距離僅か60cm。

ダメだ……風邪を引いた訳でもないのに体の震えが止まらない。寒気がする。

「はい、薫君。あゝん」

「な……むぐっ！」

テーブルに並べられている豪華な夕食。その中から、野菜炒めを少々箸で掴んで俺の口に運んでくる奈々。

これは、普通の男子ならば願ってもないぐらいの嬉しい事なのだろう。だが、俺には拷問以外の何者でもない……

奈々に静止を呼びかけようとしたが、時はすでに遅かった。これも、無理矢理に俺の口を開かせねじこむようにして口の中に、少し焦げ目のついた野菜炒めを放り込まれた。

「おいしい？ねえ、薫君。おいしい？お母さんと一緒に作ったんだよ？」

おいしい。おいしいのだろうが、何故か今一味が分からなかった。奈々と言う女性に対する恐怖。その事によって俺は味覚までおかしくなったのだろうか？

だが、ここでおいしいと言わなかったらどうなるのだろうか？想像したくもない……

「おい……し——むぐぐッ！」

おいしいと言おうとした瞬間に、何かを口に再度放り込まれた。
一瞬息が詰まるかと思ったが、なんとかゴクリと唾と一緒に飲み込んだ。しかし、何を食わされたんだ？

「薫君。ハンバーグの味はどう？　これはね、お母さんから聞いた薫君の大好物だからって、私が一から一生懸命作ったの！だからおいしいでしょ？おいしくない訳ないよね？」

どうやらさっき口の中に放り込まれた、料理はハンバーグだったようだ。確かに俺の大好物だ。だが、今、この状況で味なんて分かる別けがない。

更に言えば、食感すら分からなかったから何を食べたのかすら分からなかった。

これでおいしいと聞かれても、なんとも言えない。

「ねえ……おいしい？」

「っ！！」

さっきまでニコニコだった奈々の表情が一変した。

鋭く、俺の瞳を抉るかのような視線。俺の座っているイスに手を置き、ゆっくりと近づいてくる。

「お、おいしい……」

「そっか。よかった。薫君にそう言ってもらえるなんて、私凄くうれしいよ。ほら、まだいっぱいあるからジャンジャン食べてね」
♪

俺から離れて、ニコニコの表情に戻る奈々。 さっきの怖いくらいに冷え切っていた時とは別人だ。

◇

「全部食べてくれたんだ。嬉しいな、も〜」

そう言って奈々は真っ赤なエプロンを纏い、ルンルン気分で俺が食べ終えた食器を次々と洗っていく。俺はというと、ソファアで屍となっていた。

帰ってきていきなり女に抱きつかれ、そして僅か60cmの距離で「あ〜ん」なんて言う、危険な行為。 昼間の保健室での事も合わせて、正直もう体力も気力も0・6しか残っていないだろう。

「お風呂もう入れてあるから、入ったら？ 薫君」

お、気が利くじゃないか……今もこう言った、気が利く所も残っているもんだな。 本当、こうなる前は優しくて気が利く、かわいい女の子だったのに……。 あの時は奈々の事が好きだった、でもその好きが奈々を変えた。

俺は、近くに多端であった洗濯物から着替えを取り風呂場へと向かった。

「は〜。 何で、俺は奈々がこの家に住むことに対してこうまで、否定しないのだろうか？」

入浴剤で、白く濁った湯船に映る自分の顔を見ながら呟く。
否定はしているのだろう。今すぐにでも、奈々をこの家から追い出したい気持ちはある。だが、追い出せない……女性恐怖症。そして、何よりその原因である奈々が——怖い。
なのにどこか、家に住むことになった奈々を受けれている俺。

「俺は、まだ……あいつの事が、好き……なのか？」

だから、あいつがこの家に住むことを全力で拒否しない。また、昔みたいに一緒に居たい。そんな事を心のどこかで、無意識に思っているのか？

分からない……

——バシャバシャ。風呂の湯で顔をこすりつけるようにして洗う。さっき洗った髪が、ダランと俺の視界を覆う。

「伸びたな……」

どうでもいい事を呟く。本当にふと思ったことを口にしたにすぎない。

だが、その呟きと同時にガラッと、浴室のドアが開く音が聞こえた。

「な、な……！？」

入ってきたのは奈々だった。タオルで体を覆い、隠しているが、普通入ってくるか！？

それに、俺は奈々と違って全裸だ。ギリギリ湯につかっている事によって見えてはいないが、無理だ！

ただでさえ女がダメなのに、こんなハプニングは御免だ。

「何で出ようとするの？ 恥ずかしいの？」

「当たり前だ！」

「何で？ 昔はよく一緒に入ってたのに」

「む、昔は……あれだ！ とにかく俺は出る！」

そう言って、俺は手すりに掛けてあったタオルを腰に巻き、浴室を出ようとした。もう限界だ。さっきから奈々に対してビビッてだけど、我慢してきた。だけど、もう無理だ。

しかし、それを奈々が許しはしなかった……

「何で、私から逃げるの……」

「ッ！！」

俺の背に抱きついてくる奈々。一瞬にして、俺は自由を奪われた……。

（逃げている訳じゃない。ただ、怖いんだ……女が怖い。でも、奈々に対してはそれだけじゃない。——また、お前を壊してしまいたいので……）

でも、やっぱりこれは——逃げているのだろうか？

奈々の心臓の鼓動がドクン、ドクンと分かる。背に当たる二つの大きな膨らみ。耳元から聞こえる奈々の呼吸。髪から落ちた水滴がピチャンと響く音。

俺の停止と同時に、何もかもが停止したかのように、静まり返っていた。

奈々は、俺に抱きついていた手を更にぎゅっと締め付ける。だが、不思議と痛くはなかった。

「薫君……好きだよ……」

一瞬。一瞬だが、その言葉を聞いた瞬間に体の震えが止まった。奈々に対して抱いていた恐怖が、頭の中から消えてクリアになった。だが、クリアになったと同時に、俺は昼間と同様に闇に落ちていった。



次に眼を覚ました時には、ベットのの上だった。

「そういや、俺……風呂で奈々に抱きつかれて、そんでなんか……」

今一頭がシャキツとしない。

「zzz」

「わあ!？」

ビククリした。本気で焦った。

隣で、俺と一緒に布団に潜り込んでいる奈々がいた。これは、誰でも驚くだろう。そして、俺はまたまたまた固まった。

密着。腕は、風呂場で見たときも思ったが、以外に大きい奈々の胸に抱え込まれ、頭は俺の肩に、足は奈々の両足に挟まれ……色々とやばい。

流石の俺も、恐怖の中にどこかピンク色の感じが頭の中を、五分の2がしめていた。

俺は驚きの声を発するのと同時に、体が飛び跳ねてしまった。だが、それでも起きなかった奈々に何故かホッとする俺。

ふとベットの横の棚に置いてある時計を見る。針は約3時25

分を指していた。

——ダラダラ。冷や汗が体を流れていく。やばい、また意識が遠のいていく……。

部屋は真っ暗。そして、隣には俺の天敵が密着している。これで俺が恐怖を感じない筈はない。

——ガチャ。部屋のドアを開かれる音がした。それと、同時にパツと部屋の電気がつけられる。

「薫、どうかしたの？」

部屋に入ってきたのは、母さんだった。どうやら、俺の叫び(?)に気づいて様子を見に来たらしい。

「か、かあ、ん。ヘル、ぷ」

途切れ途切れの俺の助けに、母さんはウッフと微笑み、俺を抱き起こす。

それでも俺から離れない奈々。

「奈々ちゃん、本当に薫の事が好きなのね」

「そ、そう……なんだけどさ」

不思議と、俺は母さんに対しては恐怖を感じない。カウンセリングの先生が言うには、安心できるからとかなんとか言っていた。

「それよりさ、なんで奈々が家^{うち}に住むことに……」

今の光景を第三者が見たらどう思うだろう？
体の動かない俺を、支えている母。そして、その俺に抱きついて
寝ている奈々。うーん。

「昨日ね、奈々ちゃんの両親から電話がかかってきたのよ」

母さんと奈々の両親は、昔からの友達。だから近所に住んでいた
俺と奈々も自然と仲がよかった。風呂とか一緒に入ったり……お
っと、いかんいかん。

奈々の両親からかかってきた電話の内容は、簡単に説明すると、

奈々が一人暮らしするのは心配だから、預かってくれ。
ちよっと略しすぎたかもしれないが、まあこんな感じだそうだ。
それを、母さんはOKした。

「なんで俺が女性恐怖症って事分かっててそんな事……」
「女性恐怖症だからよ。奈々ちゃんと一緒に暮らして、貴方のそれ
が治るかもってね」

30超えたおばさんが、何をそんなにかわい子ぶってんだか。
まあ、20代後半にしか見えてないからいいけどさ……。

「あつそ、まあとにかく奈々をどうにかしてくれ」
「えー、いいじゃない。これからは一緒に寝れば。あ、エッチな事
は程々にね？」
「んな事するかー！」

俺が叫んだと同時に、パッと俺を支えていた手を離してさっさと
電気を消して部屋を出て行く俺の親。

あんな事普通、実の母親が言いますか？

「てか、母さんが居なくなっってからどうしてか、また体の震えが止まらないんだが……やべ、また落ちる」

そして俺はまたまたまた意識を失った。

第3話（後書き）

まずは更新が遅くなってすみません。

薫と二人っきりと言う事で、ヤンデレは少し控えましたが、どうでした？

作者的にはこれからちよっと、まあ色々とあるんですが、今回はこう言ったものも書きたかったものでして。

まあ、気軽に感想などを頂ければ嬉しいです。

今度の更新・・・何時だろう？

第4話



「薰くゝん。朝ご飯が出来ましたよ」

ピンクのエプロン姿で、俺の部屋のドアが勢いよく開けられる奈々。それと同時に、半覚醒状態で寝ていた俺はビクツと飛び跳ねて布団にもぐりこむ。

——ガクガクガクガク

「早く起きないと遅刻しちゃうようよ？」

「わ、分かったから今すぐ出て行ってく——っ！」

出て行ってくれ。そう言おうとしたが、その前に奈々が俺の布団に潜り込んできやがった。

幼馴染のモーニングコールで起こされる。どこかの成人向けPCゲームの主人公のようだ。しかし、俺にとってはただのいい迷惑。

「起きる！起きるからっ！早く離れ——むぐっ！」

またしても、俺の言葉を無視する奈々。しかも、今度なんだ……キスされてしまった。

しかも、俺はファ、ファーストキスを奪われた。こんなムードもクソもない場所、一人用ベッドの布団の中で……チーン。



「ほら、早く食べてしまいなさいよ。遅刻するわよ？」

急いで、一階リビングに駆け込む俺を出迎えたのは、俺が唯一恐怖を感じない女性。母さんだった。

しかし時刻は九時過ぎと、既に遅刻だ。それなのに、遅刻するわよ？と言われてもなー。

「奈々ちゃんには先に行ってもらったから。あんたもとっとと行っ
てきなさい」

「ああ、あれ？今日はご飯に味噌汁なんだ」

椿家の朝食は、食パンと目玉焼きと決まっている（いや、別に決ま
ってはいない）。

それが、今日は白ご飯に味噌汁と和風(?)だった。

「奈々ちゃんが早起きして作ってくれたのよ」

「ふーん。仕方ない。食べてくか」

今更急いだ所でなにも問題はない。既に一時限目が始まっている
頃だからな。

俺は母さんの目の前の席に着き、奈々が作ってくれたという朝食
を食べることにする。

「はむ。……………美味しい（上手い）な」

二つの意味を込めて呟いた一言。それに、母さんが「でしょ」
と、可愛らしく微笑む。

最近の母さんはどこか機嫌が良い。それに、少し若返って見える。

「父さんそろそろ帰ってくるのか？」

「そうなのよ〜♪ あ〜もう、今すぐ帰ってきてくれないかしら」

俺の予想は的中した。

母さんがこれ程ルンルン気分の方は、大抵父さんが帰ってくる予兆だ。今だにラブラブな二人を見てみると、息子としては少し恥ずかしい。

父さんは海外出勤が多いせいで、一年でも数回しか帰ってこない。だからこそ、久しぶりに会った時の喜びというのがあるのだろう。

「んじゃまあ、学校行ってくるわ」

「ああ〜元耶さん」

父さんの名前を呟いて、両手をギュッと握り締めている我が母親。せめて行ってもらっしやいぐらいは言ってくれてもいいんじゃないかな？

そんな母さんを放っておいて、俺は家を出た。

ちなみに、元耶とは父さんの事である。



「すみません」

教室のドアを開けると同時に誤る俺。

クラスメイトの数人はクスクスと笑い、俺へ視線を集める。

その中の、女子の視線にビクビクしながらそろっと席に着く俺。

普通なら教師になにか言われるのだろうが、幸いにも今は数学の授業だったらしく、担当教師は光先生だった為になにも言われなかった。いや、完全に無視された。教師とどうなのだろうか？

「う……」

「……………」

隣。詳しく言うと、窓から二番目の列の最後尾の、俺の右横にいる女子生徒から異様な威圧感とでも言えбайいのだろうか？そんな感じのものが物凄く感じられる。

だが、その女子生徒は黙々とただ無言でノートをとっているだけだ。

（なんだこの空気）

周りの連中はワイワイと光先生の授業を楽しく受けているのだが、ここだけ何故か別次元のように空気が違う。

俺はずっとダラダラと嫌な汗を流し続ける。

「あ、ケシゴムガオチテシマイマシタ」

——ビクッ！

消しゴムが落ちただとっ！

しかも、綺麗に俺の足元に転がり込んでくるMONO消し。

「すみません。薫さん」

「い、いやっ、気にしないでいいぞっ！」

裏返った声で返す俺。

息を止めて、奈々が俺の机の下に手を伸ばしてくるのに耐える。奈々のヤツ、学校ではどうやらただのクラスメイトとして俺と接するつもりなのだろうか？だが昨日のように、またいつ襲われるか分からない。

ああ、俺はこれから今まで以上にビクビクと怯えながら学園生活

を送るのだろうか。

——キーンコーンカーンコーン

俺が着て十五分程で、二時限目の終わりを告げるチャイムが鳴った。

それと同時に俺は席を立ち、急いで男子トイレへと向かうべく教室を出て行く。

「おーい、薫ー」

教室を出る際に、誰かが俺を呼ぶ声が聞こえたが無視だ。

今は何故か教室にいちやいけなない雰囲気だった。何故だろうか？隣に奈々がいるからだ。

なんか理由つけて話かけてくるに違いない。それに続いてクラスの連中がもし、俺の席に集まってきてみる。俺は再び保健室に運び込まれるであろう。

「やばい、克服するどころか悪化してないか？」

昨日と今日でこのありさまだ。何度意識を失った事だろうか？このままでは、俺はなんだか死んでしまいそうな気がしそうだ。

「うす、薫。トイレで何してんだ？」

「亮二か。少し非難を、な」

「あゝ、女性恐怖症ね。まったく、お前顔は良いのに勿体無いな。ま、俺の方がイケメンだけど？」

はいはい。勝手に言ってる馬鹿。

イケメンの癖にモテないのは何ででしょうね、亮二君。

俺でもそりゃあ、女性に興味がないわけでもないが……やっぱり怖い。

「仕方ない。俺と一緒にいてやるよ」

「すまない」

用を済ませた亮二。俺はその背にビクつきながら、隠れるようにして教室へと戻っていく。この時だけは役に立つ親友である。

「あ、薫。さっき呼んだのに無視するとか、ちょっと酷くない？」

「まあまあ、いいじゃないか。つかさ。それよりもさ——」

亮二が何を言おうとしたが、その先の言葉はある一人の人物によってかき消された。

「薫さん。次の授業、教科書を忘れてしまって、よかったら見せてもらえますか？」

ニツコリと微笑みながらそう言う、奈々。いつのまに居たのかと問いたくなる。

しかし、教科書を見せろ？えと……それって、机くっつけて一緒に見ると言うことか？無理だ。そんなに接近できる訳がない。

「お、俺の教科書なら貸すから……神風さん一人で見ればいいよ」
「そんな、薫さんに悪いですよ。あ、それから私の事は奈々って呼んでください」

笑顔を絶やさないう奈々。学校では完全におしとやかキャラで通す気だ。

その奈々を見て、亮二がなにか俺の後ろで吼えている。これは男

子にとっては素晴らしい笑顔なのだろう。

「か、神風さん？ 私、隣のクラスの友達から教科書借りてきてあげようか？」

どこか棘のある言い方のつかさ。それに、額にはくっきりと何故か血管マークが浮かび上がっている。こえーよ。

「あら、鈴桐さん。いらっしゃったんですか。気づきませんでした」「い、いたんですよ。ええ、それはもう2分程前から居ましたとも」「そうですか。あ、教科書は薫さんに見せてもらいますので、お気遣いありがとうございますが結構です」

「か、薫は別にいいって言ったわけじゃないわ」

「見せてくれますか？ 薫さん」

う……非常に困った。

奈々の眼が人でも殺しそうに沈んでいる。これ、もし断ったらどうなるのだろうか？ 俺、殺されるのか？

だが、奈々が82cm以内に入ってこられてまともに授業を受けられるかと聞かれれば、無理だ。

「薫、別に断ってもいいのよ？ その時は私が友達から教科書を借りてきてあげるから」

怖い怖い怖い。女性恐怖症以外にも、何か別の恐怖をつかさから感じ取られる。

どうするか……。あーもう、なんで俺がこんなっ！



「うふふ、薫君。大好き」

「……………」

耳元で小さく囁かれた奈々の言葉も今の俺には、どうでもよかった。

結局、奈々に教科書を見せると言う事になったのだが、そう言った瞬間につかさから思い切り脛に蹴りをいれられた。

今も歯をかみ締めて、足を揺すりながら俺に視線をやってくる。何をそんなにイライラしてんだか。

「薫君が私を絶対選ぶって、思ってたよ。だって、あの娘はただの友達だもんね」

俺にしか聞こえないように喋る奈々。今は素に戻っているようだ。しかい、選ぶって何？お前が脅して決めさせたんだろうが。てか、ちょっ！

「お前、何して——」

「なにもしてないよ？フフ」

俺太ももに手を置き、ゆっくりとなぞるようにして上へと手を運ぶ奈々。いたずらをする子共のように小さく笑う。

しかも、絶妙に机でどこから見ても分からないであろう動作。俺は硬直する体を無理矢理に動かし、奈々の手を止める。

「こんな所で手を握るなんて……。誰かに見られたら恥ずかしいな」

そう言って、ぽっと頬を赤く染める奈々。

ふざけるな。もっとヤバイ事をしようとしたのは、お前だろうが。

だがそんな事も言えず、俺はただ奈々に対する恐怖でいっぱいだった。

もし授業の邪魔にならなければ、叫びたい。

「先生！今は授業中ですよねっ！」

「そ、そうですが。なにか？」

ダンッと勢いよく机を叩きながら立ち上がったつかさ。いったいどうしたと言うんだ？つかさらしくもない。

「いえ、ただ確認したかっただけですから！」

「は、はあ……」

そう言って、つかさは一瞬だが俺と奈々に視線をやった。

て、あれ？奈々のヤツがベツタリ俺にくっついてた筈が、いきなりパッと離れた。

よく分からんが助かった。

「あの娘……邪魔」

ん？　今なにか奈々が言ったような気がしたが俺の気のせいだろうか。あまりの恐怖で耳までおかしくなったのか？

授業が終わったその後、俺は何故か散々つかさに叱られた。俺、今日なんかしたかな？

◇

第4話（後書き）

今回は少し短めでしたが、どうでしたでしょうか？

つかさのキャラをなんとなく分かっていただけましたか？

まあ、作者には文才がないのでよく分からなかった方が多いかと思います。

上手く表現できたらいいんですけど・・・

では～。

第5話

「薫、今日……その、一緒に帰らない？」

「あ、ああ」

放課後。それは、つかさからの誘いだった。

一瞬ビクついたが、せっかく誘ってくれたのを断るのも悪い。よし、今日はつかさと帰るか。

ん？でも確か、今日は部活があったはずじゃないか？

ちなみに、つかさは陸上部のエース。種目は――たぶんハードル……。いや、忘れた。

「薫さん、一緒に帰りましょう」

「なっ！」

放課後。それは、奈々からの誘いだった。

背後からの声に、一瞬ビクついた俺。すぐさま自分の机を挟んで迎え撃つ。奈々の表情はいつもと同じく天使のような笑顔だ。俺にとっては悪魔だが。

「私が先に薫を誘ったんだけど？」

「あら、そんなはずある訳ないじゃないですか。薫さんが同学年の同じクラスの女子、出席番号34番の鈴桐つかさから、帰宅を一緒に――なんて薫さんが言われるはずないじゃないですか」

「残念！それが今、午後3時56分に言ったの！」

バチバチと火花を散らすのが見えるのは、俺だけだろうか？

そんな二人を放っておいて、俺はソロ〜とスカスカの鞆を手に教

室を出ていく。

放課後の誰もいない教室に女二人に、男一人。俺にはきつすぎる。それに、なんか二人が怖い。

「あら、薫さん……どこに行くんですの？」

「わー」

俺の肩を掴み、無理矢理振り向かせる奈々。一瞬ゾクッと奈々にありえないものを感じた。

「わ、わあああああ！」

「ちょ、薫っ！」

「薫さん！」

ダッシュ。奈々の手を振り払い、全速力で教室を出て廊下を叫びながらダッシュ。

ヘタレと言うなら、否定はしない。それでもこれが俺だ！つばはるかおる椿薫だ！



「薫……」

「薫さん……」

薫が教室を出て行き、たぶん一人で帰った頃。

教室に取り残された二人の女子。奈々、つかさ。互いに手を教室の出口に伸ばしたまま固まっている。

ゆっくりと自分の真横にいる“敵”へと振り向く。

「もう！今日は部活が休みになったから、久しぶりに薫と帰ろうと思ったのに！なんで邪魔するのよ！」

「邪魔は鈴桐さん。貴方の方です。何故薫さんにそこまで付き纏うんですか。薫さんが女性恐怖症だって知っててやってるのですか？」
「っ！ 昨日転校してきたばかりの貴方に薫の何を知ってるのよ！ 神風さんこそ、なんでまだ初対面同然の薫にそこまで付き纏うの？」

つかさに怒鳴られた奈々の繭がピクッと動いた。

そして次には、自分の鞆を薫の机にバンツと叩きつける。そして

「私が薫君の何を知ってる？ 全部知ってる。薫君の事なら全部知ってる。だって、私は小学校の頃までずっと薫君の傍を離れたことなんてないもん。鈴桐さん程度にそんな事言われたくありません！ 私と薫君は——」

下を俯き、怒りを表すかのように両の手で拳を作りギュッと握り締める。

その事につかさは、変らずの怒った表情で奈々を上から見下すかのように見つめる。

つかさは、奈々の言葉の中に薫の事を薫さんではなく、薫君と呼んだことに気がついた。

「だからなによ。もし、本当に小学生の頃までは一緒だったからってなによ。貴方は中学の三年間、薫がどれだけ怯えてたか知ってるの？ 今でもまだマシになった方よ」

「……………」

奈々はつかさの言葉に無言。それを見たつかさは話の続きをする。

「一年の頃なんか、女の子から怯えて自殺までしようとしてたのよ

……」

「自殺？薫君が？そうだったんだ。私がいなかったから、薫君は――」

小さく。つかさには聞こえない。自分にだけ聞こえる程度に小さく呟く奈々。

そして、何かに取り付かれたかのように、奈々は薫の机の上にある鞆を持つとフラフラと教室の出口へと向かう。

「なによ……もう……」

一人教室に取り残されたつかさ。

奈々がもつと言い返してくるのかと思っていたが、拍子抜けだ。

つかさは『はぁ』とため息をつきながら、横にあった薫の席に座るなり机に突っ放す。

今日は部活が休みのはずなのに、凄く疲れた様子のつかさ。



「ハア……ハア……」

学校から家まで、一度も休まずずっと走って帰ってきた。

家に入るなり、背をドアに預けて息を整える。

「なんだってんだよ……奈々は分かるけど、つかさまで」

つかさと知り合ったのは中学だから、小学6年の最後に転校した奈々とは面識がないはず。

なのになんだ、あの二人の仲の悪さ。相性が悪いのか？でも、そんなに二人共話してる所も見たことないが。

てか、奈々は昨日転校してきたばかりだし。

「あら、薫。奈々ちゃんは？」

「分かん。先に帰ってきた」

「そう……。あ、元耶さん帰ってくるの明後日だって」

「ふん」

俺は別段興味なさそうに、階段を登っていく。正直言うと、興味ない。どうでもいい。

仕事だから仕方ないとは思うが、家をほったらかしておいて。

母さんだって、元気に振舞ってはいるがきつと何か思ってるだろう。

昔はそんな母さんを見るのが辛かった。

二階にある自分の部屋の取ってに手をかけた時。俺は気づいた。物置部屋になっていた部屋の扉が開いている事に。少し気になり、中をのぞくと――

「どこだよ、ここ」

そこは一言で言うならば、女の子の部屋。

いやいやいや。あの大量のダンボールの山はどこいった？

そこは気にしないにしても、もしかして奈々がこの部屋を使うのか？ うん。たぶんそうだ。

いくら母さんでも、ここまで可愛い部屋を使う訳がない。

しかし、奈々の部屋を作ってくれたのは助かった。なにせ、昨日の晩のように俺の部屋で寝られたらたまったもんじゃないからな。うん、グッジョブ母さん。

『あ、ただいんです。お母さん』

「げっ！」

一階の玄関から聞こえる、奈々の声。もう帰ってきたのか。
奈々の部屋たぶんのドアを閉め、逃げ込むようにいつもと変らない平凡男子高校生である自分の部屋へと戻りドアの鍵をガチッと閉める。

——ドッドドド！

「ひいっ！」

階段を凄い勢いで駆け上がってくる足音がした。そして次の瞬間。
ガチャガチャ、と鍵が閉まったドアを開ける音が背後のドアから聞こえる。

「薫君！薫君！開けて、私だよ奈々だよ」

そんな事は分かっている。お前だから開けないんだよ。俺の無言の返事に、奈々は何度も何度もドアをノック（叩いている）する。
一分、五分、十分。このままじゃ、永遠とドアを叩き続ける可能性がある奈々。

仕方なく。仕方なくドアの鍵をそつと解除。

同時に、勢いよくドアが開かれ奈々が飛び込んできやがった。

「あ、あ……あ、ああ——」

今の体勢を説明しよう。飛び込んできた奈々は俺を押し倒し、胸に自分の顔を埋めている。

俺は途切れ途切れに言葉を発する。いや、もはや言葉ではない。
ただ平仮名でいう一番最初の文字を連呼しているだけだ。

「薫君、私がいなくて寂しかったんだね。ごめんね、ごめんね。でも、これからは私が傍にいるから。高校を卒業してもずっと一緒だよ。一生、私は薫君の傍から離れない。そしたら、薫君の女性恐怖症なんてすぐ治るよ」

は？意味が分からん。これはなんだ。告白か？プロポーズか？にしても突然帰ってきていったいどうしたと言うんだ。明らかに異常じゃないか。

「そうだ。ずっと一緒にいるんだから、私達結婚しようよ。だって、早い方がいいに決まってる！薫君が18になったらすぐしょ？結婚で、高校生でも出来るんだっけ？もし無理なら、高校卒業してからでも。あ、でも薫君はこれでいい？ね、どうなの？いいよね。うん決定。丁度お父さんも明後日に帰ってくるてお母さん言ってたし、その時に言おうね」

俺↓『チーン』



第5話（後書き）

まずは更新が凄く遅れてすみませんでした。

自分、夏休みなんかは遊びまくってて。その後もテストだったり・

でも、これが自分ですの。

ヤンデレ・・・適当とっていいほどに、自分勝手に書いてしましたがこれはヤンデレでしょうか？

さて、次回の更新は・・・？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9487m/>

女性恐怖症の俺とヤンデレの幼馴染

2011年4月6日02時57分発行